デジタルサイネージ(表示と通信にデジタル技術を活用して平面ディスプレイやプロジェクタなどによって映像や情報を表示する広告媒体)は，街中で人々が行き交う環境に存在するものであり，ディスプレイの中身だけを考えるのではなく，設置される場所，街並みの雰囲気や色彩の調和などを総合的に捉え，人々のコミュニケーションの仕組みをデザインする必要がある．コンテンツをそのまま利用するのではなく，活用・体験のされ方，体験される場・状況を作り出すこと．バイオマス電力生成工場の普及促進と電力のPRを行ったもので，生ごみを捨てるという日常生活に結びつき，その行為により生ごみが資源エネルギーになり，社会のための付加価値を生み出すということ．イベントを行い，街中でお茶を飲み終わった方々に棒茶のティーバックを捨ててもらい，その行為によりスクリーン(デジタルサイネージ)に，「電気が作られる」というようなイメージを表示させた．捨てられる数によって光の加減なども変わりその場にいた人たちのコミュニケーションにも繋がった．